

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：18001

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K02529

研究課題名(和文) 荒れる子どもを理解し受容する多様性を認める学級づくり

研究課題名(英文) Classroom Management Acknowledge Diversity by Understanding and Accepting Children Who Behave Violently

研究代表者

丹野 清彦 (tanno, Kiyohiko)

琉球大学・教育学研究科・教授

研究者番号：80761080

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、荒れる子どもを理解し受容する多様性を認める学級づくりのための指導プログラムづくりを目的としている。研究を通して次の3点が明らかになった。ひとつは多様性を認め受容するためには、子ども理解を進めることであり、言語化が重要である。また荒れる子どもの関心から活動や学習を作っていくことが重要であり、その道筋をプログラムに取り込む必要がある。最後に言語化と活動を通して、学級の子どもたちと繋ぐ視点を持ち、学級づくりを進めることが重要だということが明らかになった。以上のことから子どもたちの態度を言葉として読み取る力と興味や関心を取り入れたプログラム作成の重要性が成果として得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では3つの面で学術的、社会的意義がある。一つは荒れる子どもを理解できず、崩壊や病気休職に追い込まれる教員にとって、どのような対応が重要であるかを教師へのアンケートや聞き取り調査、継続的な観察から子ども理解と教員の葛藤について明らかにしている。

もう一つは、荒れる子どもの態度を発達支援的なニーズとして読み取る視点である。子どもの荒れる言動を読み取り、そこを起点とした活動や学習が重要であることを明らかにしている。

さらに、教師と荒れる子どもの2者関係に終わるのではなく、学級の子どもたちとどうつなぐのか。学級づくりに広げるプログラムを明らかにしており、学術的にも社会的にも大変意義がある。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to create an instruction program to manage a classroom that acknowledge diversity by understanding and accepting children who behave violently. This research shows three points mainly. First, it is important to verbalize in understanding children for accepting diversity. Second, it is also important to promote children's understanding and verbalize based on interests of violent behaved children. Third, it is also important to manage classrooms in having the view to connect children based on the verbalization and activities in the classroom.

Therefore, the results show that the importance of creating the program that integrates the ability of verbalizing the children's attitude and interests of children.

研究分野：教師支援

キーワード：荒れる子ども 子ども理解 教師の困り感バーンアウト 多様性 学級づくり

様式 C - 19 , F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、「荒れる子どもを理解し受容する多様性を認める学級づくり」のための指導プログラム開発を目的とし、研究当初から激変する社会から取り残される子どもたちと、荒れる子どもたちを前に苦悩する教師を救う取り組みを行うものである。

沖縄の社会は、「ゆいまーる」と呼ばれる相互扶助のつながりによって、貧しくても幸福度の高い社会という認識が県民の間でも共有されてきた。しかし、急速な都市化と貧困等に起因する家庭環境の機能不全も重なり、地域社会で支える事が不可能になっている。そのため、子どもの問題行動（荒れ）が様々な形で表出している。児童生徒の問題行動状況調査（2019）によると沖縄県の小中学校では、暴力行為の発生件数（千人あたり）は、全国平均（4.4）の約2倍、いじめ認知件数（1校あたりの発生件数）が全国平均（30.9）の約2倍、不登校率も全国平均（5.4）の約1.5倍ある。教員の病休者も10年連続で全国1位である。これに加え沖縄県は相対的な貧困率が37.5%にのぼっており、全国平均（13.8%）と比較して2倍以上である（毎日新聞, 2016）。このように、子どもを取り巻く状況だけでなく社会の状況においても深刻であり、沖縄県は荒れる子どもが増え、対応に苦慮して心を病む教師が続出し、学習環境が悪化するという悪循環が顕在化している背景がある。

2. 研究の目的

- (1) 現代社会の問題が凝縮されたモデル地域ともいえる沖縄で、荒れる子どもを受容し、多様性を認める学級づくりの指導プログラムを開発し、学校現場で実践することが、このような悪循環を断つために必要不可欠であると考え、主たる目的としている。
- (2) この研究の成果は全国の学校でも活用でき、荒れる子どもを前に苦悩する教師を救う有効な手立てになる。

3. 研究の方法

過去の研究ではアンケート調査等を中心にしたものが多く、回答する教師が個々の問題点や児童生徒との客観的な関係性を十分に理解していないケースや、効果的な学級経営の手法の開発につながっていない側面も見られた。そこで研究の方法としてアンケート調査に加え、ナラティブの分析法等を活用して聞き取り、さらに観察や実践報告を定期的に継続し、相互の関わりから指導プログラム開発を行うものである。具体的な方法は以下の通りである。

(1) 教員へのアンケートの実施

新人教員からベテラン教員に至るまで、県内の約5%の教員を対象にアンケートを行い、教師の考えと学級経営の関係性の実態について分析する。

(2) 映像や実践記録を分析する

研究協力校の学級を対象にした映像や記録を詳細に分析する質的調査を行う事によって、教師と児童生徒による個々の関係性とその問題点について明らかにする。

(3) 継続的な観察やインタビューの実施

様々なエピソードや授業観察等を継続して行うため学級・学校に入る。また、場合によっては、ICTを活用したインタビュー等を実施し、変化と背景を記録する。

(4) 自由参加型研究会の継続的な開催

教師が自由に参加して、個々の悩みを共有することができる自由参加型の研修会を開催し、実践報告を行い、荒れる子どもに対する悩みや実践事例の収集に努める。

(5) 多様な子どもを受容する学級づくりのモデル化

これらの結果について詳細な分析を通して、多様な子どもを受容する指導法の開発を行う。

4. 研究成果

事例収集にあたってはコロナ禍の状況もあり、困難を窮することもあったが、ICTの活用等により乗り越え、以下のような成果を得ることができた。

(1) 感情を言語化する

言語化には、出来事を言葉でなぞるという意味があり、2度体験することになる。その上自分から見た事実だけでなく、「嬉しかった」など感情の言語化が重要であることが観察等からわかった。特に感情を受け止めてもらう経験（生育歴）が乏しかった子どもにおいては、受容と言語化を通して、否定的な表現から肯定的な言葉へと移行する。感情を言語化するには、聞き取ってくれる他者が必要であり、これが受容であり出発点である。

(2) 興味を生かす重要性

実践事例の収集を通して、多様性を認める学級づくりへ進んだ事例に共通する転換点は、荒れる子どもの興味を取り入れた実践である。James Gilligan (2011) は、リスペクトの重要性を説いている。興味を尊重するとは本人の興味が例えば魚だとする。ダンボールを使い魚釣り屋さんからスタートし、街づくりへと発展させる。この想像力を発揮するごっこ遊びを取り入れた実践を展開すると安心感が生まれ、人間関係づくりにおいて、大きな変化をもたらした。ふたつには、潜在的な力を外在化できる活動は、荒れる子どもにとって活躍の場を与えられ、暴れる暇がなくなる。問題行動を力で抑えるのではなく、魅力的な活動で問題行動をする暇がなくなったという状態を作ることが理想的であり、実践の方向である。

最後に、小学校低学年であれば生活科の時間も活用しつつ、座学だけでなく豊かな活動を展開していくことは、荒れる子どもだけではなく、すべての子どもに保障されるべきもので、発達のエネルギーを発揮できる活動や授業を創造していくことが重要であることが明確になった。

(3) 言語化を通して周りに広げる

山城・丹野 (2024) は実践において振り返りを重要なものとして位置付け実践し、多様な考えがあることを子どもに知らせることが重要だとしている。ケネス・J・ガーゲン (2018) は、彼から見た現実をまず受け止め、一度引き受ける。そのうち、こちらから見た世界や他者の感じ方を提示したいと述べている。これは多様な他者がいることを彼らの前に開くためである。授業でもまとめる際に、振り返り、記述するだけでなく、読み合い交流すると自分とは異なる他者に出会う。このような集団に広げる視点を持つことが大変重要である。

(4) なぜ多様性を受け止められず、教師は追い込まれるのか

アンケートの結果を分析すると「抱えている悩み」と情緒不安定性について(図1)は、相談の場の有無にかかわらず、同様に悩みを抱えて生きていることを示している。

指標項目	回答						Wilcoxon の順位和検定	
	相談の場がない			相談の場がある			Z 値	P 値
	N	平均 ± SD	中央値	N	平均 ± SD	中央値		
児童・生徒指導上の悩み	245	2.08 ± 0.60	2.0	218	2.03 ± 0.56	2.0	0.47	0.494
子どもへ寄り添いたい気持ち	244	3.69 ± 0.52	4.0	218	3.79 ± 0.44	4.0	5.1	<0.05
情緒的支援	244	2.22 ± 0.71	2.2	218	2.11 ± 0.75	2.0	3.37	0.066

図1. 「相談の場の有無」と各指標値の関係

次に「子どもへ寄り添いたい気持ち」については、全体として「寄り添いたい」と回答した人の割合が高く、「相談の場がある」と回答したグループの得点が統計上有意に高かった（図1）。困り感や悩みを他者に相談することで、解決や軽減した肯定的経験を持っていると考えられる。相談の場は「ケア」的空間の機能を持ち、帰るべき拠り所であり、安心できる場である。

村末（2024）は、これに加えて「子どもに寄り添いたい」、「寄り添わなければならない」という思いが脅迫的に先行し、相談の場を求めすぎ、自分を追い込んでしまう危険性もある。また、「子どもに寄り添いたい」と願いながらも、そうは言えない事例もある。相談の場は情緒的だけでなく、「子どもに寄り添う」実践をどうイメージするのか。具体的な姿を示す必要があると指摘し、プログラムづくりにおいて試行した。

(5) 自由参加型の意義

教員のバーンアウトを予防する要因として、ソーシャルサポートが有効であると多くの研究で指摘されている。職場の同僚からの援助を受けることがバーンアウト対策のための方略として有効であることが報告されている（中川ら、2000）。しかし、ソーシャルサポートは重要ではあるが、多忙により相談しづらく、個人的な付き合いも減少し、他の教員のサポートをしている余裕がないことも報告されている（落合、2003）。そのため、各自の問題意識に基づく多様な教師支援が必要である。

本研究で取り上げた自由参加型研究会において、丹野・杉尾（2024）は一人で解決できない問題を抱えた際には、職場だけでなく、第3の場所としての研究会等（図2）で、他者の助けを借り、経緯を言語化し、共有する事によって多様な方法を模索できると述べている。相談の場は、相互の実践力を向上させる面もあり、多様な場を設定する重要性について、参加者の感想や実践から明らかになった。

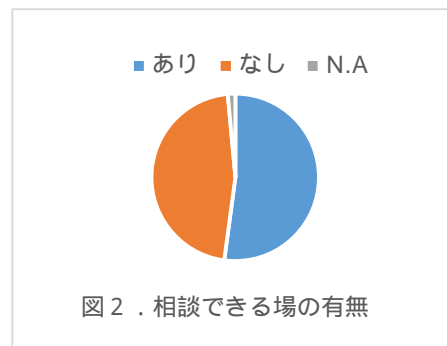


図2．相談できる場の有無

(6) モデルとなる指導プログラム

事例を分析し、継続的な観察を通して、子どもとの関係が改善された共通点をまとめると、次のようなプログラムが明確になった。

子ども観察と子ども理解が重要であり、理解にはライフヒストリーを含んでいる。

「辛かったね」と共感的に寄り添い、子どもの感情と言動を言語化し安心感を育む。

子どもを受容し、荒れる子の興味を探る。

授業には、子どもの興味があること（遊びや活動）を取り入れ、出番をつくる。

遊びや活動を一人から二人、学級へと広げ、多様性を認める居場所をつくる。

これらの過程全てを通して言語化を図る。

今後は、このプログラムをより多く実践し蓄積して、さらに細かなプログラム化を図りたい。

最後に、ある教師の言葉でまとめたい。子どもの言動を言語化し、読み取ることができるようになると、自分にも変化が起きた。それは、荒れる態度は教師への不満と受け取り、私自身傷つきを覚えていた。しかし、否定的な態度は叫びであり、発達要求だと読み取ることができるようになると、子どもの否定的な態度は、教師である私を攻撃しているのではなく、受け止めてほしいと求めているのだと考えられるようになり、私は再び子どもと向き合うことができた。

参考文献

James.Gilligan,佐藤和夫訳,2011,『男が暴力をふるうのはなぜかーそのメカニズムと予防』,大月書店.

- Kenneth.J. Gergen・伊藤守監修, 2018, 「現実はいつも対話から生まれる」, デイスカバー・トウエンテイワン.
- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課, 2017, 平成 30 年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果
https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/10/1422020.htm(2020/9/25 最終閲覧).
- 村末勇介・宮国泰史・丹野清彦・杉尾幸司, 2024, 「沖縄県の小学校教師の教員生活に関する意識の実態(1)」 『琉球大学教育学部紀要』, 104 : 139-153.
- 中川剛太・小谷英文・西村馨・井上直子・西川昌弘・能 幸夫, 2000, 「教師の対人ストレス方略の臨床心理学的研究(1) - 実態調査にもとづく基礎研究 - 」 『国際基督教大学学報教育研究』, 42 : 101-123 .
- 落合美貴子, 2003, 「教師バーンアウトのメカニズム - ある公立中学校職員室のエスノグラフィ - 」 『コミュニティ心理学研究』, 6 : 72-89 .
- 丹野清彦・杉尾幸司, 2024, 「職場での人間関係や児童への対応に苦慮する教員の実態調査」, 『琉球大学教育学研究科高度教職実戦専攻紀要』, 8 : 101-112 .
- 山城太智・丹野清彦, 2024, 「荒れる子どもも理解し受容する学級づくりに取り組む視点」, 『琉球大学教育学研究科高度教職実戦専攻紀要』, 8 : 113-126 .

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 丹野清彦・杉尾幸司	4. 巻 8
2. 論文標題 職場での人間関係や児童への対応に苦慮する教員の実態調査	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 琉球大学教育学研究科高度教職実践専攻紀要	6. 最初と最後の頁 101-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山城太智・丹野清彦	4. 巻 8
2. 論文標題 荒れる子ども理解し受容する学級づくりに取り組む視点	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 琉球大学教育学研究科高度教職実践専攻紀要	6. 最初と最後の頁 113-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村末勇介・宮国泰史・丹野清彦・杉尾幸司	4. 巻 8
2. 論文標題 包括的性教育の展開に向けた実践課題の明確化(1) - はじめ規定「学校全体で共通理解を図ること」という留意点に関する検討を中心に -	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 琉球大学教育学研究科高度教職実践専攻紀要	6. 最初と最後の頁 57-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村末勇介・宮国泰史・丹野清彦・杉尾幸司	4. 巻 104
2. 論文標題 沖縄県の小学校教師の教員生活に関する意識の実態(1) - 沖縄県の小学校学級づくりに関するアンケート2022の結果分析を通して -	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 琉球大学教育学部紀要 第104集	6. 最初と最後の頁 139-153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丹野清彦	4. 巻 第63回
2. 論文標題 小学校高学年の集団づくり分科会基調	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 全国生活指導研究協議会第63回全国大会紀要	6. 最初と最後の頁 93 94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丹野清彦・杉尾浩司	4. 巻 7
2. 論文標題 職場での人間関係や児童への対応に苦慮する教員の実態調査	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻紀要	6. 最初と最後の頁 111 122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村末勇介	4. 巻 7
2. 論文標題 「生命(いのち)の安全教育」を性教育として展開するために	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻紀要	6. 最初と最後の頁 47 61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丹野清彦・片桐功	4. 巻 6
2. 論文標題 コロナ禍の学校で	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻紀要	6. 最初と最後の頁 71 82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 與座優太・丹野清彦・丹野千草・高橋孝明・浅野誠	4. 巻 6
2. 論文標題 態度という言葉で表現する子ども	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻紀要	6. 最初と最後の頁 57 70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 船越祐輝・村末勇介	4. 巻 6
2. 論文標題 脳性まひ児の書きことばの学習による「世界づくり」に関する研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻紀要	6. 最初と最後の頁 97 114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金城 満・杉尾幸司	4. 巻 6
2. 論文標題 「総合的な学習の時間」におけるリモート授業の実践報告 - Webシステムを活用した取り組みと学生による評価 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻紀要	6. 最初と最後の頁 153 163
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計5件

1. 著者名 浅井 春夫・谷村 久美子・村末 勇介・渡邊 安衣子	4. 発行年 2024年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 275
3. 書名 「国際セクシュアリティ教ガイダンス」活用ガイド：包括的性教育を教育・福祉・医療・保健の現場で実践するために	

1. 著者名 楠凡之・丹野清彦	4. 発行年 2022年
2. 出版社 高文研	5. 総ページ数 256
3. 書名 感情コントロールに苦しむ子ども・理解と対応	

1. 著者名 村末勇介・五代孝輔	4. 発行年 2022年
2. 出版社 エイデル研究所	5. 総ページ数 8
3. 書名 季刊セクシュアリティ まずは、ここから始めてみては？	

1. 著者名 村末勇介	4. 発行年 2022年
2. 出版社 旬報社	5. 総ページ数 6
3. 書名 雑誌教育，教師が子どもと創る性の学習	

1. 著者名 村末勇介	4. 発行年 2021年
2. 出版社 エイデル研究所	5. 総ページ数 207
3. 書名 子どもの"いのち"に寄り添う仕事、教室で物語が生まれる	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	村末 勇介 (Murase Yusuke) (10782344)	琉球大学・教育学研究科・准教授 (18001)	
研究分担者	杉尾 幸司 (Sugio kouzi) (20433089)	琉球大学・教育学研究科・教授 (18001)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関